# カム地域のチベット系諸言語における方向接辞*

鈴木博之

**摘要**　“趋向前缀”在藏缅语中羌语支语言中成为系统性的语法范畴。具有趋向前缀的语言大致分布在藏文化圈，与藏语支语言有密切的联系。然而，其范畴在藏语言学里几乎没有提到。根据近期研究，藏语支语言的不少的语言已拥有较为单纯的趋向前缀系统，其中一少部分语言有更发展的趋向前缀范畴。本文针对藏语支语言中的趋向前缀提供更深入的解释，分别对其形态和功能进行描写。

**キーワード**　チベット系諸言語　カムチベット語　方向接辞　文法化　命令文

## 1. はじめに

チベット・ビルマ諸語の記述研究において、「方向接辞」と呼ばれる、複数の形態素からなる形態統語論上の範疇が存在する。これは動詞語幹に前接する形で、当該動詞語幹の表す意味に加えて、その具体的な動作の方向を示す根本的機能を中心に、心理的な方向を表したり、固定化したと考えられる特定の方向接辞と共起することで、文法範疇（特に「完了[Chime Lhamo 2024]」や「アオリスト[Tashi Nyima and Suzuki 2019]」）を表す機能があることが報告されている。体系化した方向接辞を持つ言語群は、いわゆる「羌語群」と呼ばれる諸言語に該当し、その多くは東チベットに分布する（孙 1982, 2014、Shirai 2020）。

Chirkova（2012：137）は、方向接辞は羌語群に特有のものではないとしつつ、Matisoff（2004）などの先行研究では方向接辞の存在が羌語群として認められる重要な証拠的特徴であると述べる。方向接辞は類型的特徴の１つであり、祖語からの共通の改新を示すものではない。類型的特徴はまた地域特徴にもなりうる。このことは、最近のチベット系諸言語（Tibetic[1]）の研究成果の中に、東チベットに分布する諸言語について体系的な方向接辞をもつものが認められるという報告（鈴木 2021, Tournadre and Suzuki 2023）に例証されるといえる。このような状況である一方、方向接辞を扱う議論ではチベット系諸言語が数えられることはない（荒川・池田 2022）ため、特にその類型的特徴を対照し、相違点を明らかにする作業が必要である。このため本稿は、チベット系諸言語の中で報告される方向接辞の体系を把握している範囲でまとめ、かつその地理言語学的特徴を概観することで、続く研究に資するものとする。

本稿で言及するチベット系諸言語は、Tournadre and Suzuki（2023）のいう南東群（South-eastern Section）、すなわちカムチベット語の諸方言についてである。その中でrDzayul（察隅）方言群の Tshawarong（察瓦龍）方言について、鈴木（2021）が方向接辞の体系を示している。そのほかにも、Tournadre and Suzuki（2023：460）は同方言群の nGulag（古拉）方言について、複数の方向接辞の具体例を示している。

* 本稿は 2023-2025 年度日本学術振興会科学研究費補助金国際共同研究加速基金（国際先導研究）「「時空言語学」の創成：地理と歴史を融合した言語の変化と発展への新たなアプローチ」（研究代表者：菊澤律子、課題番号 24K23937）の成果の一部である。

[1] Tibetic という用語の定義は Tournadre and Suzuki（2023）に従う。

本稿では、まず2節でチベット系諸言語における方向接辞の形態論的特徴を示し、特に方向表現から方向接辞へ文法化したと考えられる点を示す。続く3節で書く方向接辞の用法を記述する。特に、文法化の度合いに従い、複数の動詞語幹が方向接辞を取りうるもの、命令形を形成するときに方向接辞を取りうるもの、特定の移動動詞（「行く」「来る」など、空間の移動を伴う動詞語幹のカテゴリー）の場合に方向接辞を取りうるものを記述する。最後に、記述を通して明らかになった方言間の差異を言語地図に表し、考察を加える。

## 2. 形態論から見た方向標示と方向接辞

チベット系諸言語において、動詞の表す動作の向かう方向を直接示す方法には、動詞語幹に先行する方向を表す形態素によるものがある[2]。この形態素は、狭義では名詞類に属するといえるが、機能としては副詞すなわち動詞を直接修飾するものに数えられる。

例えば、蔵文 yar に対応する形式は「上（へ）」という意味を持つが、文語においては通常位格標識 la を伴って用いられ、yar la の形で動詞（語幹のみ、及び語幹前接要素すなわち疑問辞及び否定辞を含む動詞）の前に置かれることで、動詞語幹の表す動作が「上へ」という方向をもって起こることを示す[3]。一方、口語の中には la に相当する格標識を用いず、yar 単独で、かつ動詞の語幹前接要素として現れるものがある。このうち、後者における方向標示を「方向接辞」と呼び、方向接辞には文語の実詞として蔵文の対応関係があるものと、個別方言にのみ見られる形式がある。表1に方向接辞として認められる主な形態を掲げる。対応する蔵文形式があるものは、それで示す。

表 1 方向標識の形態素（蔵文に対応があるものは蔵文で表記）

| 形態素 | 語義 | 副詞形//接辞形 |
|---|---|---|
| yar | 地理的・物理的・心理的な上方 | yar la // yar- |
| mar | 地理的・物理的・心理的な下方 | mar la // mar- |
| phar | 話者から離れる | phar la // phar- |
| tshur | 話者に近づく | tshur la // tshur- |
| pa | 話者との距離がない | N/A // pa- |
| la | 話者との距離がある | N/A // la- |

表1から、方向接辞として機能しうる蔵文形式は4方向があるといえる。蔵文の表す空間上の本質的な意味を表1の上から順に示すと、「上」「下」「外」「内」となるが、口語での使用については、単に空間の絶対的な位置関係に加えて、話者から見た心理的方向や聞き手との場所関係に基づいて、その方向に合致する方向標識が付加される。これらの形式はおよそほとんどのチベット系言語に認められるが、それぞれの変種において、方向接辞であるか方向標識であるかの異なりがある。一方、表1の下から1・2段目にある形態は対応する蔵文が認められず、加えて限定的な方言にのみ認められる。

では、方向標識と方向接辞ではどのような形態論的異同が認められるだろうか。まず、その形態の音節数について、前者は2音節（各形態素＋la）であることが通例で、後者は1音節であるということは、上述の通りである。1音節形式の場合、さらに副詞的な機

[2] ほかにも、動詞に後続する形態素（「接尾辞」とするか「助動詞」とするかは研究者による）が担うものもある。証拠性標示もまた方向標示にかかわる。

[3] 本稿における蔵文形式は、de Nebesky-Wojkowitz（1956）によるローマ字翻字で示す。また、古典文語形式のほかにも古チベット語のつづりも含みうる。また、対応する文語形式が存在しない場合も、語源と音対応を考慮して仮の文語つづりを与える。

能があるか、動詞語幹における前接要素に数えられるかの違いがある。前接要素の場合、そのスロットが独立しているのか、疑問辞や否定辞と同じスロットにあり共起できないかという異なりがある。

副詞であるかどうかは、調類による対立をなす声調を持つ言語の場合、形態音韻的に明らかに異なるふるまいを見せる。すなわち、前接辞として機能する場合、方向標識自体が独立した声調を持たず、後続の動詞語幹と共通の声調領域（語声調）を形成する。副詞である場合は、方向標識と動詞語幹ともに独立の声調領域を形成し、それぞれの声調形を保つ。ただし、方向標識と疑問辞・否定辞が共起した場合、方向標識部分の声調領域は独立するため、声調は見かけ上副詞と同様にふるまうことになる。

方向標識の形態素を yar、動詞語幹を'gro「行く」とした場合の例を、以下に掲げる。

(1) yar la 'gro
上へ 行く
「上のほうへ行く」（方向標識は 2 音節の副詞）

(2) yar 'gro
上へ 行く
「上のほうへ行く」（方向標識は 1 音節の副詞；声調言語の場合、各形態素に独立した声調がある）

(3) yar-'gro
DIR-行く
「上へ行く」（方向標識は動詞接頭辞）

(4) yar-ma-'gro
DIR-NEG-行く
「上へ行かない、上へ行くな」（方向標識は動詞接頭辞で独立したスロットがある）

(5) yar la ma-'gro
上へ NEG-行く
「上へ行かない、上へ行くな」（方向標識は副詞；否定辞と方向接辞が共用のスロットになる場合の否定形）

以上の分類を表形式にまとめると、表 2 のようになる。

表 2 方向標識と方向接辞の関係と分類

| 音節数 | 機能 | スロット |
|---|---|---|
| 2 | 副詞 | 副詞として独立 |
| 1 | 副詞 | 副詞として独立 |
| | 動詞前接辞 | 前接辞の中で独立したスロット |
| | | 他の前接辞と同じスロット |

さて、方向標識が接辞として用いられるのは、筆者の一次資料及び先行研究が扱う範

囲で、カム地域のチベット系諸言語（カムチベット語[4]）に認められる。高度に範疇化された方向接辞を持つチベット・ビルマ系諸言語の分布（Shirai 2020; Roche and Suzuki 2017, 2018 も参照）とは異なり、南部カム地域に分布する諸変種に見られるのが特徴的である。筆者の確認している限り、体系的な方向接辞は rDzayul 方言群のみに見られる。文法化が進みつつある方向接辞は、sDerong-nJol（得榮德欽）方言群、Chaphreng（鄉城）方言群、Sems-kyi-nyila（香格里拉）方言群に見られる。これらを含むカムチベット語諸方言の分布域を図 1 に示す[5]。図 1 上に示した地点名は、本稿の記述で取り上げるものである。

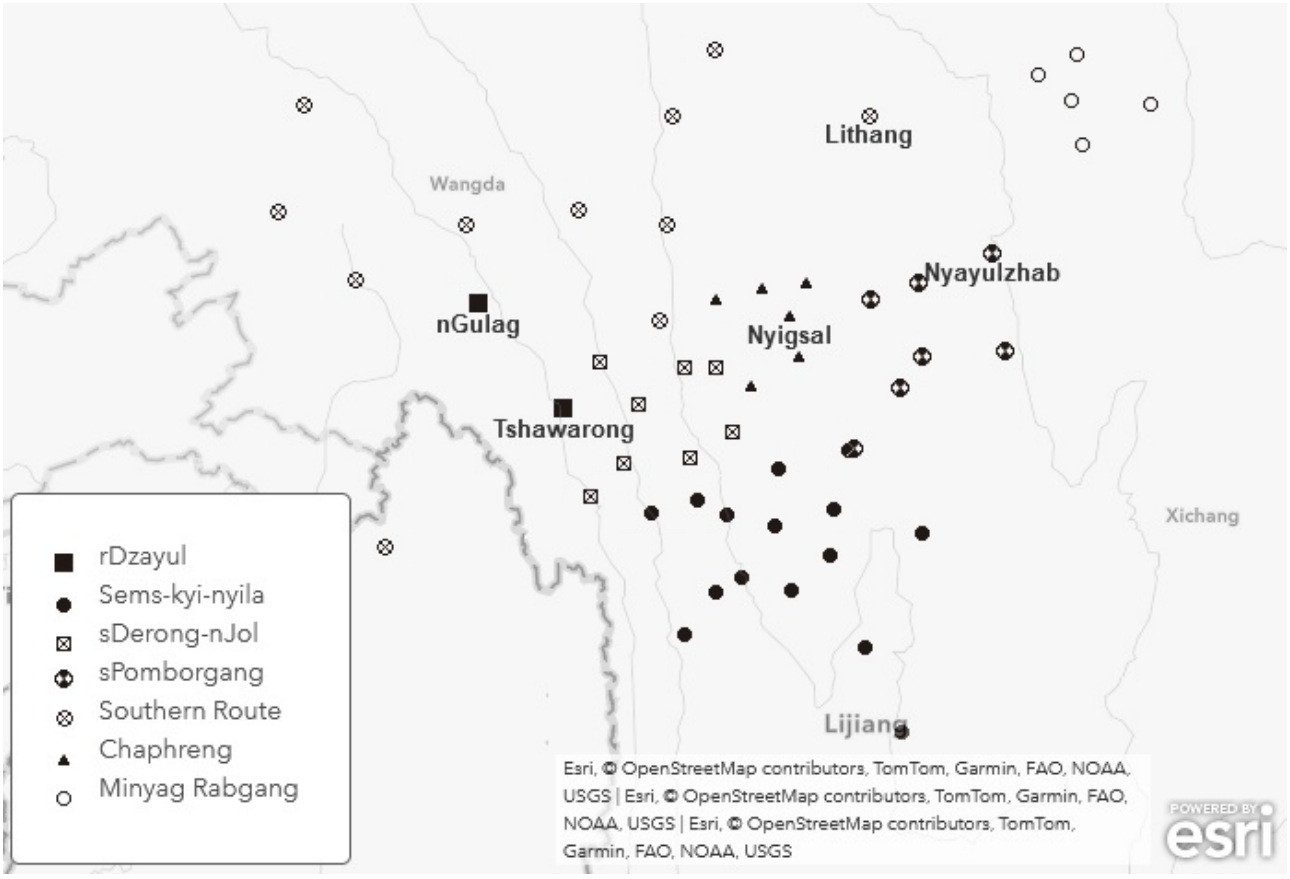



図 1 カム地域南部におけるチベット系諸言語の分布

なお、rDzayul 方言群の分布地域の近隣には、方向接辞を持つ言語として、ラモ語が挙げられる（Tashi Nyima and Suzuki 2019, Suzuki et al. 2021, Suzuki and Tashi Nyima 2021）。ただし、両者の直接的な言語接触は確認されていないが、ラモ語及びその姉妹言語が rDzayul 方言群の基層言語になった可能性はあるだろう。いずれにせよ、このような問いが正当かどうかを議論するうえでも、チベット系諸言語における方向接辞の用法を記述することが重要な役割を果たすと言える。

[4] 当該地域にはアムドチベット語も分布する（鈴木 2018；Suzuki and Sonam Wangmo 2019）が、現在の一次資料の中では、方向表現は接辞として現れない。
[5] 図 1 以外の方言分布については、Tournadre and Suzuki（2023）を参照。また、図 1 の範囲内において、より地点数の多い詳細な分布図については、Suzuki（2022）などを参照。

## 3. 方向接辞の用法

本節では、方向接辞としての用法を軸に記述する。方向接辞は、前節に見たように、文法化の度合いに基づいて、方向接辞として体系化された範疇を持つ言語、方向接辞の文法化が進みつつある言語、方向接辞への文法化が限定的に現れる言語という３つのカテゴリーに分類できる。ここでは、先行研究で言及のあるものも含め、方向接辞として体系化された範疇の実態と、方向接辞の文法化が進みつつある現状について、それぞれ記述する。

### 3.1 方向接辞として体系化された範疇

範疇として体系化された方向接辞は、カム地域のチベット系諸言語の中でも、rDzayul 方言群に属する言語に特に認められる。この方言群では、移動動詞以外にも多くの語彙動詞語幹が特定の方向接辞をとる。動詞語幹と方向接辞の間の意味的関連は一定程度存在すると言えるが、具体的な方向を示すわけではなく、またテンス・アスペクトによらず現れることが特徴的である。このタイプの方向接辞は、語幹前接要素である疑問辞や否定辞と共起することはない。

まず、Tournadre and Suzuki（2023：460）が記述する nGulag 方言の事例を見ると、「食べる」という動詞について、方向接辞 phar と tshur が付加される例が挙がっている。これらは動作の向かう方向および発話環境によって使い分けがある。また、この方向接辞は否定辞とは独立して現れず、否定文では現れない。

(6) phar-za
DIR-食べる
「食べろ」（Tournadre and Suzuki 2023：460, 例 358；一部改）

（6）の場合、方向標識は「外・離れる」を意味する。すなわち、話者から見て、動作は聞き手の方向へ行われることを含意する。双方向き合った状態で、料理がその間にあるとすると、食事を口に運ぶ動作は話者から見て聞き手のほうへ「離れる」と解釈できる。

(7) tshur-bzas-yin
DIR-食べる-AOR.EGP
「私は食べた」（Tournadre and Suzuki 2023：460, 例 359；一部改）

（7）の場合、方向標識は「内・近づく」を意味する。すなわち、話者から見て、動作は話者自身の方向へ行われることを含意する。話者が食事を口に運ぶ動作は話者から見て聞き手のほうへ「近づく」と解釈できる。

(8) ma-bzas
NEG-食べる
「私は食べなかった」（Tournadre and Suzuki 2023：460, 例 360；一部改）

（8）の場合、方向標識は用いられない。nGulag 方言では、方向接辞と否定辞は同じスロットに割り振られるため、方向接辞が標示されなくなる。そもそも「食べる」という動詞は移動動詞ではないため、方向を表す必然性はない。このような場合、（5）のように、無理に方向標識を副詞として用いる必要もないという文法体系といえる。

次に、鈴木（2021：119）が記述する Tshawarong 方言について見る。この方言の方向接辞は、蔵文形式で整理すると表 1 と同様の形態が認められる。その中で、動詞語幹によって、方向接辞の母音に異なりが現れる。ただし、その異同の条件は現在の資料ではまだはっきりとしない。表 3 に、方向接辞と動詞語幹の組み合わせをまとめる。

表 3 Tshawarong 方言における方向接辞と動詞語幹の組み合わせ

| 方向接辞 | 方向の概念 | 動詞語幹 |
|---|---|---|
| yar- | 上へ | sad「起きる、目覚める」mang「増える」 |
| mar- | 下へ | babs「落ちる、下りる」、mid「飲みこむ」、dran「思い出す」 |
| phar- | 外へ | 'phyag「拭き消す」、bcag「壊す」、zer「言う」 |
| tshur- | 手前へ | sgril「包む」、'then「引く」、lon「手に入れる」 |
| pa- | ？ | さまざまな動詞の命令形の場合 |
| la- | ？ | gsal「明るくする、灯す」、'gro「行く、入る」 |

表 3 を見ると、方向の概念と動詞の表す動作の間に多くは関連を認めることができる。pa-と la-については、前者が形態統語論的に特定の機能（命令形）を持つ場合に用いられる、方向とは関連しないが同一のスロットに入る形態とであるといえ、後者は動作が表すものが話者の視点から見て特定の方向を示しえない場合、特に話者に関わらない第三者の動作の方向について、または抽象的な動作について用いられる。また、Tshawarong 方言の場合、rDzayul 方言と異なり、移動を表す動詞語幹を除き、1 つの動詞語幹が取りうる方向接辞は一定している。

表 3 のうち、mar-に対応する形式の中には、/ma-/という音形を取るものがある。これは否定辞の 1 つ/ma-/と一致する。方向接辞か否定辞かの判別は、動詞語幹との組み合わせで一義的に決まる場合（例 9）もあるが、そうでない場合（例 10a, b；音声実現は同一）の解釈は文脈による。

(9) ma-red
NEG-CPV.STM
「いいえ；[そう]でない」

(10) a. mar-rgyag
DIR-閉める
「閉める；閉めろ」
b. ma-rgyag
NEG-閉める
「閉めなかった」

また、動詞語幹単独で用いられるときの意味と方向接辞がついたときの意味に異なりがあるもの（例 11）で、移動動詞でなくとも、1 つの動詞語幹が複数の方向接辞を取ることができるものがある（例 11b, c）。

(11) a. dran
思う
「思う；考える」

b. mar-dran
DIR-思う
「思い出している：覚えている」
c. la-dran
DIR-思う
「[突然]思い出す」

Tshawarong 方言は方向接辞が比較的多く用いられる体系を持つとはいえ、すべての動詞が方向接辞とともに用いられる必要はなく、たとえば「軽動詞」として用いられる bzo、byed、rgyag には方向接辞が現れにくい。命令表現であっても、pa-の使用は義務的ではないが、語気を表すために文末標識が現れうる。

(12) a. chang sa bzo(-ya)
結婚式 LV(-SFT)
「結婚する；結婚しろ」
b. chang sa pa-bzo
結婚式 DIR-LV
「結婚しろ」

なお、pa-は 3.2 で記述するように、複数の言語で命令形として用いられるが、la-については周辺の方言群には認められない。非チベット系言語であるラモ語には存在し、そのほかいくつかの Qiangic に認められる（Shirai 2020）。今後はこの影響があるかどうかの考察が求められる。

### 3.2 方向接辞の文法化の過程

チベット系諸言語の動詞の形態統語論において、動詞語幹に先行しうる接辞は非常に限定的である。広く認められるのは否定辞（mi-/myi-, ma-及び限定的な方言で gar-[6]）である。東チベットで話されるチベット系諸言語では、さらに疑問辞（a-/e-[7]）がある。否定辞と疑問辞は通常共起しない[8]。否定疑問の場合は否定辞はそのままで、動詞句末に専用の疑問標識が現れることで表現する。

さて、動詞語幹前接要素のスロットの中に方向接辞が入ることで、「副詞としての方向標識が方向接辞へと文法化する」と考える。文法化の度合いという視点で考えると、次の２段階が区別できる。１つは、方向接辞が否定辞や疑問辞とは別個のスロットを持つ事例（たとえば例 4）である。もう１つは方向接辞が否定辞や疑問辞と共起しない、すなわち１つのスロットに入ると考えられる事例（たとえば例 5）である。後者については、各言語の体系に従い、文法性に関する人為的な内省と判定の手続きを経ない限り判別することはできない。

一方、方向標識が完全に文法化していない例として、命令形に先行するという特徴を挙げることができる。カムチベット語の多くの方言では、動詞の形態変化は失われてい

[6] gar-は方向接辞が発達している言語を中心に用いられる、反語表現を起源とする否定辞である。詳細については、Suzuki and Lozong Lhamo（2020, 2021）、鈴木（2022）も参照。
[7] 文語における疑問標識は e-であるが、カムチベット語の多くでは[ʔa-]と発音される。文語で a-となる標識は疑義を表すモダリティの標識（「～かな、～だろうか」）として機能する。このため、a-と e-の両者は本来別個の意味を持つ形態素である。
[8] 諾否疑問も否定も極性を表す表現としてまとめることができるため、共起しないことは「極性標識」の観点から見ると自然な現象と言える。

るが、命令形のみ語幹交替の形で独立した形態をもつ動詞がある。チベット系諸言語に共通して存在するのは、「来る」という語義の'ong で、その命令形は shog となる。命令形は、前接要素を伴うことがなく、禁止命令は ma-'ong となり、*ma-shog ではない。ところが、方向標識は共起可能である。

(13) tshur shog
こちら 来る.IMPR
「こっちへ来い」（Tournadre and Suzuki 2023：459, 例 354；一部改）

（13）の語釈に示したように、この場合の方向標識は 1 音節の副詞と見ることで、命令形とその前接要素の共起を回避するという分析を採用することで現象に矛盾のない説明としている。これは命令形動詞語幹と声調領域を異にすることからも支持できる。このことは、方向接辞の形式が、その音形を変えることなく、ただ声調領域を変更するだけで動詞語幹の前に現れうることを意味し、方向接辞の文法化が否定辞や疑問辞と同じレベルとみなせないことを示している。

以上に示した現象と相反するように見えるのが、命令形を形成するために必要とされる pa-である。この形式は、sDerong-nJol 方言群の一部と Chaphreng 方言群の諸方言によく見られる形式である。この接辞を使う諸方言において、（13）のように「来る」の命令形 shog は方向接辞とともに用いられるが、pa-とは共起しない。（14）に Nyigsal（尼斯）方言（Chaphreng 方言群）の例を示す。

(14) a. tshur shog
こちら 来る.IMPR
「こっちへ来い」

b.?? phar shog
あちら 来る.IMPR
（「あちらへ来い」は不自然）

c. yar shog
上へ 来る.IMPR
「上がって来い」

d. mar shog
下へ 来る.IMPR
「下りて来い」

e.* pa-shog
DIR-来る.IMPR
（「来い」を意図した場合、命令用の方向接辞は不要）

f.* pa-'ong
DIR-来る
（「来い」を意図した場合、非命令形語幹は使用できない）

g. shog
来る.IMPR
「来い」

（14）の中で、(14b) はその意味によって不自然であると判断される。phar は話者の視点から離れる方向を示し、動詞「来る」は話者に近づく動作を示すためである。しかし、構造上は（14a, c, d）と共通する。一方、(14e) は方向接辞と伴う形式であると記述したため、文法的でない。命令形に方向接辞は付加されない。かといって、(14f) のように、非命令形語幹を使用したうえで、命令形を形成する方向接辞を付加することも文法的でないと判断される。方向を明示しない「来い」という場合は、(14g) のように、命令形を単独で使う方法のみが文法的となる。

ここで注意が必要なのが、「行く」を意味する'gro についてである。チベット文語では、この動詞の命令形は、「来る」と同様に、別語幹 song を用いる動詞とされる。ところが、この命令形に相当する語幹は、(15e) に示すように、pa-と共起できる。これは、Nyigsal 方言では、文語の命令形 song が非命令形'gro と対応するだけでなく、異なる語義を持っているからである。まず、'gro は「行く」の語義を持つが、そのままでも命令形のように方向接辞とともに用いられ、その場合は勧誘の意味になる（15a)。それに対し、song は命令形として使われると、２人称に対する命令の意味になる（15b)。ところが、pa-と共起可能かつ自然なのは song になる（15c, d)。また、方向接辞を用いなくても、それぞれ勧誘（15e)、命令（15f）の意味を持つ。また、(15d) の存在から、song は命令形語幹であるという認識がなく（命令形語幹であれば前接辞はつかない；cf. 14e, f)、通常の動詞語幹であり、その意味は単に「行く」ではなく、「立ち去る」であると考えることができる。

(15) a. phar 'gro
あちら 行く
「あちらに行こう」

b. phar song
あちら 去る
「あちらに行け」

c.?? pa-'gro
DIR-行く
（「行こう」の意味では不自然）

d. pa-song
DIR-去る
「立ち去れ；失せろ」（発話者の視界から出ていけの意）

e. 'gro
行く
「行こう」

f. song
去る
「行け；どけ」（発話者の前から移動しろの意）

以上のように、命令形が特別な語幹を持つ動詞であれば pa-は用いられないが、大多数の行為動詞はそれを付加することで命令形となる。

(16) pa-btsong
DIR-売る
「売れ；売って」

(17) pa-bsad
DIR-殺す
「殺せ；殺して」

このpa-の用法について、「命令」と記述してきたが、正確に言えば、「命令」ではなく、「行為の実現」を表すと言える。すなわち、(16) も (17) も日本語の命令形を用いて訳を与えるのは、その用法を正しく反映していない。(16) では、店での買い物をする場面でよく用いられる。店員に向かって「売れ」と命令するのは語用論的に不自然である。「売ってくれ」または「売って」というような訳が適切であろう。(17) についても、たとえば鶏をしめるときに、技術のない子どもが親に頼むときに用いる表現である。そこに狭義の命令の意味が含まれることはない。すなわち、pa-が方向接辞の範疇のもとで機能する場合、その文法化の本質は「行為の達成・実現を指令する」ことにあり、それを単独で使うことによって、実現していない行為の実現を示す用法となり、命令形と並ぶ表現方式となったと考えることができる[9]。

以上に述べた点を考慮すると、pa-の性質は勧誘とは相いれない。その文法判断で (15c) のように不自然になるのも、勧誘は「行為の達成・実現を指令する」のみならず、話者もまた達成・実現させなければならないからである。このことも踏まえ、pa-を「指令法 (injunctive) の機能を持つ接辞」と分析することは可能である。ただし、それもまた方向接辞のスロットに入り、現在の資料では方向接辞と共起することはない。このpa-は文語形式の動詞形態論におけるb-接頭辞[10]との関連も考慮すべきであるため、新しいカテゴリーを設けることの妥当性は今後の検討課題である。

以上のようにpa-を用いるのは、カムチベット語の中でも南部の方言群に限られる。その他の方言群では、表 1 に示した「上、下、外、内」の 4 方向を示す要素が前接辞のようにふるまうか、または方向標識は接辞にならず、1 音節であれ 2 音節であれ副詞のように働くものと分析できる。また、方向接辞が伴うことができる動詞語幹は、移動を伴う表現が可能な動作動詞に限られる。このようなタイプとして、(18) に Nyayulzhab (牙衣河) 方言 (sPomborgang 方言群) の例を示す[11]。

(18) a. yar-khyer
DIR-体の前方に持つ
「上へ持っていく；持ち上げる」
b. mar-khyer
DIR-体の前方に持つ
「下へ持っていく」

[9] これは日本語の助動詞「た」が表すものと共通すると言える。日本語の場合、(16) の発話環境であれば、売り手が「買った、買った」と客に声をかけることが通例であろう。
[10] 文語の動詞形態論における接頭辞 b-は、現代口語では語幹の一部と分析される。注目に値するのは、この b-は文語の「過去形」「未来形」を形成するときに現れる傾向にあるという点で、「実現」や「達成」との意味的関連がありうる。
[11] Nyayulzhab 方言の場合、「外」の方向接辞は (18c) のように、phar ではなく phyir「外へ」が用いられる。

c. phyir-khyer
DIR-体の前方に持つ
「外へ持っていく；持ち出す」
d. tshur-khyer
DIR-体の前方に持つ
「中へ持ってくる；持ち込む」

（18）で用いられる動詞 khyer の中核的な語義は「体の前方に（手で）持つ」であり、それ自体は方向を明示しない。これに方向接辞がつくことによって、「持って移動する」の意味が現れる。Nyayulzhab 方言では、方向接辞は否定辞や疑問辞と共起可能である。

(19) a. yar-ma-khyer
DIR-NEG-体の前方に持つ
「上へ持っていかなかった」
b. yar-a-khyer
DIR-Q-体の前方に持つ
「上へ持っていくか」

否定辞や疑問辞は、声調領域を新たに規定することができる接辞であるため、（19）の場合方向接辞は単独で声調領域を形成する。そうすると、方向接辞が接辞であるか副詞であるか、文法上の位置づけを声調という基準で判定することができない。それであっても、（19）が方向接辞であると言えるのは、その直前に副詞として yar la「上へ」という方向表現と共起することができるからである。ただし、共起可能であるとはいえ、使用頻度が高いわけではなく、文法的であるかどうかの聞き取り調査における判断であるといえる。

方向接辞が肯定文にのみ現れる方言もある。このような方言では、否定辞や疑問辞が現れる場合、方向接辞部分が副詞となり、１音節形式または２音節形式として実現するしかなくなる。（20）に Lethong（理塘）方言（南路方言群）の例を掲げる。

(20) a. yar-’gro
DIR-行く
「上へ行く」（方向接辞）
b. yar a-’gro
上へ Q-行く
「上へ行くか」（１音節の副詞）
c. yar la a-’gro
上へ Q-行く
「上へ行くか」（２音節の副詞）

以上のタイプにあてはまらない諸言語については、方向表現を副詞として表し、動詞形態論には参与しない。

### 3.3 文法化のまとめ

以上に見てきた方向接辞について、文法化の過程を歴史的発展の順にまとめると、次に示すように、（A）～（D）の段階を認めることができる。

（A）方向表現は、チベット系諸言語に共通して副詞の働きをする形態素（yar「上」; mar「下」; phar/phyir「外」; tshur「内」）が存在する。それらは通常与格標識-la を伴い、２音節形式で用いられる。一方、方向標識として１音節形式で用いられる言語もある。この１音節形式は固有の声調領域を保ち、かつ弱化することはない。

（B）１音節形式の副詞として機能する方向表現が、肯定文において移動の意味を伴う動詞の接頭辞として１音節の動詞語幹とともに１つの声調領域を形成する。この状況は、本来存在する動詞接頭辞の否定辞や疑問辞のふるまいと共通する。このとき、方向標識は方向接辞になったといえる。また、独立した命令形語幹には方向接辞はつかず、方向表現は副詞として現れる。なお、否定辞や疑問辞との共起制限について、次の下位分類を行うことができる。

（B1）否定辞や疑問辞と方向接辞は共起しない。このため、否定辞や疑問辞がある場合、方向表現は副詞として現れる。

（B2）否定辞や疑問辞と方向接辞は共起することができ、その場合、方向接辞が否定辞や疑問辞に先行する。

（C）肯定文に限定された方向接辞＋動詞語幹の声調領域の一体化が認められる言語の中に、特に命令表現を表す接辞 pa-が現れるものがある。この接辞は「行為の達成・実現を指令する」ことを含意する形態素である。方向表現に由来しないが、他の方向接辞と共起することはなく、形態統語論上は方向接辞の一種に数える。

（D）pa-を用いる言語の中に、さらに la-という接辞が現れるものがある。この形態素の用法は完全にわかってはいない。より文法化が進んだ言語にのみ認められ、方向を示さないような動作動詞にも特定の方向接辞が現れうる。

以上のうち、（A）はチベット系諸言語全体に共通して見られる枠組みとみなせる。（C）は Chaphreng 方言群、sDerong-nJol 方言群の諸方言に相当し、（D）は rDzayul 方言群の諸方言に相当する。なお、（C）の特徴は Sems-kyi-nyila 方言群のいくつかの方言でも認められる。たとえば、鈴木（2011）の Zhollam（勺洛）方言[12]、鈴木（2012）の Sakar（斯嘎）方言[13]、鈴木（2014）の Choswateng（吹亞頂）方言の記述がある。

残る（B）については調査が不十分であり、現段階でその分布を特定することは困難であるが、カム地域南部の南路方言群、sPomborgang 方言群などに属する方言にその現象が認められる。

### 3.4　文法化の地図化とその考察

3.3 の分類について、図 1 上に等語線[14]を書き入れて方言区分とともに反映した言語地図が図 2 である。上記（C）と（D）については、その分布地域、すなわち等語線で囲まれる地域が閉じていて、かつ両者は隣接していることが図 2 から分かる。この点に注目すると、方向接辞への高度な発展というのは、地域的に連続する範囲で起こっていると言えるだろう。なお、（C）については、さらに詳細な研究を通し等語線を修正することになる見通しがある。

（C）と（D）の外側は、現段階では（B）の特徴を示す方言が多いと言えるが、等語

[12] Zhollam 方言では、本稿の言う yar-, mar-, pa-の３つの方向接辞が確認されるにとどまる（鈴木 2011: 27）。

[13] 鈴木（2012）の発表当時は、Sakar 方言は sDerong-nJol 方言群に属する方言という立場であった。その後、Suzuki（2024）で所属が Sems-kyi-nyila 方言群であるという見解を示した。

[14] 文法上の特徴についても、その分布の範囲を描く線を「等語線（isogloss）」と呼ぶ。

線を引くことができるほどデータが十分ではない。一方、地図上で〇で示した Minyag Rabgang(木雅熱崗)方言群の言語の中には(B)を示す方言がある(鈴木、四郎翁姆 2016)。また、地図外に分布域がある北路方言群などでは、複数の方言が（A）を示す。すなわち、（A）と（B）の等語線は、本稿の対象外とした地域にある可能性が高い。

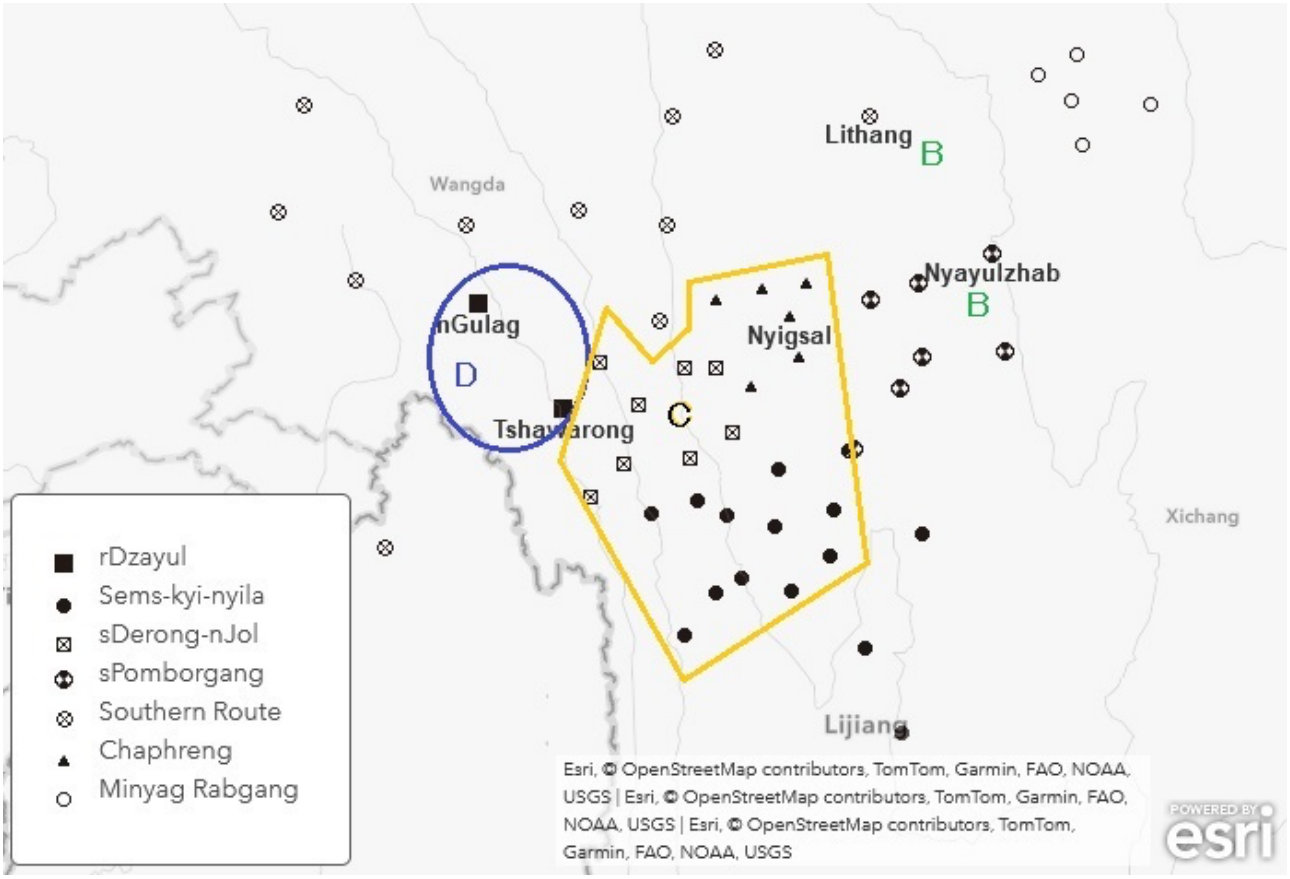



図 2 カム地域南部における方向接辞の文法化の度合いを示した言語地図

## 4. まとめ

本稿では、カム地域南部に分布するカムチベット語諸方言における方向標識と方向接辞について記述した。チベット系諸言語における副詞に方向標示の中で、方向接辞として文法化された体系をもつ言語から、文法化が進んでいく過程を見せる言語も取り上げ、その接辞としてのふるまいを明らかにした。一方で、心理的な方向については触れることができなかった。今後の課題としたい。

また、本稿では、pa-という方向接辞の機能について、より詳細な考察を行った。特に、独立した命令形の動詞語幹との共起が可能であることに注目し、それが他の方向接辞とは異なる特徴であることを指摘した。加えて、その機能は命令というよりは行為の達成・実現の指令であるという可能性を示唆した。ただし、本稿では pa-が方向接辞と同列に扱うという見解を変更するまでには至らなかった。

本稿はカムチベット語諸方言の記述に限定したが、この記述の原点には東チベットを中心の分布域とする非チベット系諸言語における方向接辞がある。今後は言語を超えた対照研究を見据えて、より詳細な研究を進めていきたい。

〈略号〉

AOR アオリスト
CPV 判断動詞
DIR 方向接辞
EGP 向自己
IMPR 命令
LV 軽動詞
NEG 否定辞
Q 疑問辞
SFT 文末標識
STM 陳述

〈参照文献〉

荒川慎太郎・池田巧 2022.『シナ＝チベット系諸言語の文法現象３：方向接辞の機能』京都：京都大学人文科学研究所。URI: http://hdl.handle.net/2433/289122
鈴木博之 2011.「カムチベット語嘎嘎塘・勺洛[Zhollam]方言の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』3: 1–35 頁。URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00000837/
鈴木博之 2012.「カムチベット語燕門・斯嘎[Sakar]方言の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』4: 123–158 頁。URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00000849/
鈴木博之 2014.「カムチベット語小中甸・吹亞頂[Choswateng]方言の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』6: 1–40 頁。URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00000860/
鈴木博之 2021.「カムチベット語察瓦龍[Tshawarong]方言の音声記述」『アジア・アフリカの言語と言語学』15: 105–137 頁。doi: https://doi.org/10.15026/99899
鈴木博之、四郎翁姆 2016.「カムチベット語塔公[Lhagang]方言の文法スケッチ」『地球研言語記述論集』8: 21–90 頁。URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/

铃木博之 2018.《理塘县及其周边藏族语言现状调查与分析》,《民族学刊》2: 35–44+106–109 页。doi: https://doi.org/10.3969/j.issn.1674-9391.2018.02.005
铃木博之 2022.《从“哪”到“不”：云南迪庆藏语否定标记的语法化》，林範彦・池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象５：否定の多様性』，京都：京都大学人文科学研究所，73–83 页。URI: http://hdl.handle.net/2433/275707
孙宏开 1982.《羌语支属问题初探》,《民族语文研究文集》，西宁：青海民族出版社，189–224 页。
孙宏开 2014.《八江流域的藏缅语》。北京：中国社会科学出版社。

Chime Lhamo. 2024. Verbal directional prefixes in Cheyi. *Kyoto University Linguistic Research* 43: 1–44.
Chirkova, Katia. 2012. The Qiangic subgroup from an areal perspective: A case study of languages of Muli. *Language and Linguistics* 13(1): 133–170.
Matisoff, James A. 2004. “Brightening” and the place of Xixia (Tangut) in the Qiangic. In Ying-chin Lin, Fang-min Hsu, Chun-chih Lee, Jackson T.-S. Sun, Hsiu-fang Yang, and Dah-an Ho (eds.) *Studies on Sino-Tibetan Languages: Papers in Honor of Professor Hwang-cherng Gong on his Seventieth Birthday*, 327–352. Taipei: Institute of Linguistics,

Academia Sinica.
de Nebesky-Wojkowitz, René. 1956. *Oracles and demons of Tibet: The cult and iconography of the Tibetan protective deities*. 's-Gravenhage: Mouton.
Roche, Gerald and Hiroyuki Suzuki. 2017. Mapping the Linguistic Minorities of the Eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics VI —"Means to Count Nouns" in Asian Languages—*, 28–42. URI: https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf
Roche, Gerald and Hiroyuki Suzuki. 2018. Tibet's minority languages: Diversity and endangerment. *Modern Asian Studies* 52(4): 1227–1278. doi: https://doi.org/10.1017/S0026749X1600072X
Shirai, Satoko. 2020. A geolinguistic study of directional prefixes in the Qiangic language area. *Himalayan Linguistics* 19(1): 365–392. doi: https://doi.org/10.5070/H91914252
Suzuki, Hiroyuki. 2022. *Geolinguistics in the eastern Tibetosphere: An introduction*. Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.5989176
Suzuki, Hiroyuki. 2024. Shaping rGyalthangic: A historical account of Yunnan Khams. In Masaki Nohara and Takumi Ikeda (eds.) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages 6: Typology and historical change*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University. 87–108. URI: http://hdl.handle.net/2433/289968
Suzuki, Hiroyuki and Lozong Lhamo. 2020. 'Where' as a negative marker in Khams Tibetan: A geolinguistic approach towards a grammaticalisation process. In Yoshiyuki Asahi (ed.) *Proceedings of Methods XVI: Papers from the Sixteenth International Conference on Methods in Dialectology, 2017*. Berlin: Peter Lang. 289–296. doi: https://doi.org/10.3726/b17102
Suzuki, Hiroyuki and Lozong Lhamo. 2021. /ka-/ negative prefix in Choswateng Tibetan (Shangri-La, Yunnan). *Language and Linguistics* 22(4): 393–629. doi: https://doi.org/10.1075/lali.00092.suz
Suzuki, Hiroyuki and Sonam Wangmo. 2019. Migration history of Amdo-speaking pastoralists in Lhagang, Khams Minyag, based on narratives and linguistic evidence. *Archiv Orientální* Supplementa XI: 203–222.
Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo, and Tsering Samdrup. 2021. Lamei, another dialect of Lamo (mDzogong, TAR): Vocabulary and sentence structure. In Yasuhiko Nagano and Takumi Ikeda (eds.) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages 4: Link languages and archetypes in Tibeto-Burman*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University. 25–69. URI: http://hdl.handle.net/2433/263977
Suzuki, Hiroyuki and Tashi Nyima. 2021. Evidential system of copulative and existential verbs in Lamo. In Yasuhiko Nagano and Takumi Ikeda (eds.) *Grammatical phenomena of Sino-Tibetan languages 4: Link languages and archetypes in Tibeto-Burman*. Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University. 259–287. URI: http://hdl.handle.net/2433/263981
Tashi Nyima and Hiroyuki Suzuki. 2019. Newly recognised languages in Chamdo: Geography, culture, history, and language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 42(1): 38–82. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.18004.nyi
Tournadre, Nicolas and Hiroyuki Suzuki. 2023. *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan*. Villejuif: LACITO Publications. doi: https://doi.org/10.5281/zenodo.10026628